

氏名	早川淳子
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第210号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉〈集い〉の歌文化とゲーテー歌の受容と展開
総合審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（音楽学部） 檜山哲彦
（副査）	“ ” “ ”（ ” ） 成田英明
	“ ” “ ”（ ” ） 杉本和寛
	“ ” 准教授（ ” ） 大森晋輔
	“ ” 教授（ ” ） 畑瞬一郎
	“ ” “ ”（ ” ） 大角欣矢

（論文内容の要旨）

18世紀後半から19世紀にかけてのドイツは、フランス革命、啓蒙主義思想、商業の発達等の影響の下、政治的にも社会的にも激動の時代にあった。身分制度や宗教と言った伝統的な規範が崩壊する中、人々は「集い（“Gesellschaft”，“Zirkel”）」を通して新たな人間関係を築こうとした。集いでは、読書、舞踏、演劇、音楽、自然科学研究など様々な活動が行われたが、中でも、ドイツ全土で盛んに開かれたのが歌を歌う集いである。同時代の詩人や作曲家の作品、または、古い民謡などを声を合わせて歌うことで、人々は心をつにし、交流を深めたのである。

こうした集いに積極的に参加し、集いの歌文化をさらなる隆盛に導いたのがヴォルフガング・フォン・ゲーテである。ゲーテは、友人の作曲家ツェルターに「集いで歌われ得ないものは、真の歌ではない。モノログがドラマでないように。」と語っているように、詩が集いで歌われることを高く評価していた。ゲーテが集いのために提供した詩は、人々に好んで受け入れられ、積極的に歌われたのである。

本論文では、集いで歌われたゲーテの作品を考察し、集いの歌文化におけるゲーテの活躍について論じた。ゲーテが集いに提供した詩の多くは、民謡や同時代の作品など、既存の歌を取り入れて作られていることを特徴とする。そこで、本研究は、既存の作品と、そこから影響を受けて作られたゲーテの作品を対象を絞って考察を展開した。

論文は、全4章で構成され、各章の概要は以下のとおりである。

第1章では、集いの歌文化について論じた。1914年に創立されて以来、ドイツ民謡の収集、研究の中心となってきた「ドイツ民謡研究所」に所蔵される歌集を資料とし、集いの盛期、目的、歌われた歌の内容を調査した。ゲーテと集いの関わりについては、集いの盛期がゲーテのワイマール滞在期間と重なっているため、ワイマールでゲーテが参加した集いを中心に論じた。ゲーテにとって集いとは、詩を書くきっかけであり、すぐに自分の作品を歌ってもらえる場所であった。詩にメッセージを盛り込めば、歌い手にそれを直に伝えることができるという経験を通じて、ゲーテは「集いの歌」に特別な思いを抱くようになったのである。

第2、3章では、具体的な作品の考察を行った。第2章では、原作のテキストがゲーテの詩に与えた影響について考察した。ゲーテは民謡の自然な語り口や、形式を取り入れることで、表現豊かな詩を作った。一方で、人間や感情の描き方を大きく変化させている。ゲーテが原作とした作品は外側から人間を見つめているのに対して、ゲーテは描く人間の心と同化しているかのように心の内面を映し出したの

である。こうして作られたゲーテの作品は、新しく台頭してきた市民層にも好んで受け入れられることとなった。本論文の考察は、民謡が生まれたという数百年前から続く歴史の中でゲーテの詩が作られる過程を追っており、詩の伝統を受け継ぎながら、発展させる役割を果たしたゲーテの位置づけを改めて認識させた。

第3章では、原作のメロディーがゲーテの詩に与えた影響について考察した。よく知られたメロディーで歌える詩を書けば皆に歌ってもらえるという動機その他、メロディーに詩情を掻き立てられて詩を書くこともあった。メロディーの構成や動きを分析した後に、ゲーテの詩と照らし合わせてみると、ゲーテがメロディーの特徴を意識し、詩に反映させていることが指摘できた。メロディーによって引き出されたゲーテの詩は、成立の時点から音楽を内包するものであり、ゲーテの詩と音楽の強い結びつきを具体的に示すことができた。

第4章では、ゲーテの詩に付けられた曲を考察した。ゲーテが既存の歌を取り入れて作詩したように、作曲家もまた民謡や既存の歌のメロディーをとりいれていることが指摘できた。その一方で、ゲーテの詩に付けられた曲は、多かれ少なかれ、詩の内容を汲んでいた。心の内面を描き、多様な解釈を可能とするゲーテの詩は、作曲家の想像力を掻き立て、作曲家は詩の解釈を音楽で表現するようになったのである。これに伴い、メロディーや伴奏は、より技巧的になり、新しい詩と音楽の関係が生まれた。詩の歴史だけではなく、歌曲の歴史におけるゲーテの功績を本研究で明確に示すことができた。

日本ではシューベルトやシューマンによって作られた「ドイツ・リート」(芸術歌曲)には一定の人気があるが、民衆の歌とのかかわりについてはあまり触れられてこなかった。本論文では、集いという場で人々が歌っていた民衆の歌に光を当て、これが詩人ゲーテによって洗練された詩へとなり変わっていく過程を明らかにした。これによって、集いの歌文化における民衆の歌が、「ドイツ・リート」へと発展する土壌として再評価されるべきことを示した。

(総合審査結果の要旨)

ドイツ歌曲を研究対象とする本論文は、『〈集い〉の歌文化とゲーテ——歌の受容と展開』という題目から知られるように、民衆・集団のなかで実際に歌われている歌から〈芸術歌曲〉への過程を、ゲーテを中心軸にして、音楽史・文学史・文化史・社会史などを多面的に視野に入れながら考察しようとする試みである。

この論文にあって特筆すべきは、「ドイツ民謡研究所」に長期研究滞在して蒐集分析した豊富な資料が基盤となっていることである。これら確実な資料があればこそ、民謡の原詩および原曲とゲーテ作品との綿密な比較考察がなされるさい(第二、第三章)に説得力が備わり、とりわけ、口承による民謡を対象とするにあたっては、可能なかぎり古い文献を依拠すべきという点に関しての十分な配慮がうかがえる。こうした具体的対象への考察の綿密さにひきかえ、論考のキーワードである〈集い〉に関しては、論述の粗さは否めない。〈集い〉を必要とし、〈集い〉のなかから新しいものを汲み出そうとしていた時代背景(社会変動、思想、宗教など)への考察が立体的・重層的になされ、かつまた、〈集い〉そのものの実態と多様性が俯瞰的に論述されていれば、論考の厚みはさらに増したことだろう。

こうした今後の研究を待つべき点があるとはいえ、ゲーテに焦点を絞り、これまでのリート研究ではほぼ扱われることのなかった〈民謡〉の果たした役割と意味を再評価した点には独自性があり、学部時代から継続してきたドイツ民謡研究に基づいて、原典資料を駆使しつつ、ドイツリート誕生の現場を音楽と文学の両面から考察しようとした論考であり、学位取得に十分に値すると認められる。